

6. ^{201}TI SPECT にて集積を認めた前頭骨 Histiocytosis X の1例

L. Flores 星 博昭 長町 茂樹
 大西 隆 渡邊 克司 (宮崎医大・放)
 株山 剰 直井 信久 澤田 慎
 (同・眼)

症例は11歳女性で、左前頭部痛、流涙を主訴に来院した。頭部CTにて左前頭骨の破壊があり、頭部MRI上、T₁強調像にて低信号、T₂強調像にて高信号、Gd-enhance像にて辺縁部を強く造影される腫瘍像を認めた。 ^{201}TI SPECT 上は early 像(静注20分後)、delay 像(静注4時間後)とも、腫瘍に一致して強い集積が認められた。生検、病理組織学的に Histiocytosis X と診断された。塩化タリウムは悪性のみならず一部の良性骨、軟部腫瘍にも集積することは知られているが、鑑別診断に Histiocytosis X も考慮する必要があるものと思われた。

7. ドブタミン負荷タリウム心筋シンチグラフィの臨床経験

西川 卓志 二見 繁美
 (宮崎県立日南病院・放)
 平野 秀治 田口 利文 松尾 剛志
 上田 正人 (同・内)
 長町 茂樹 渡邊 克司 (宮崎医大・放)

虚血性心疾患患者の評価において運動負荷タリウム心筋シンチグラフィ是有用であるが、四肢麻痺等により運動負荷が不可能な症例が存在する。今回われわれは虚血性心疾患が疑われ、運動負荷が不可能であった10例に対しドブタミン負荷心筋シンチグラフィを施行し、その有用性と安全性について検討した。ドブタミン負荷にて脈拍は増加傾向を示したが、血圧には大きな変動はなかった。10例中5例には冠動脈造影を施行したが、ドブタミン負荷心筋シンチグラフィ所見と比較的よく一致した。ドブタミン負荷にて10例中1例に心房粗動を認めたが、ドブタミン滴下の中止にて速やかに回復した。ドブタミン負荷心筋シンチグラフィは運動負荷不能患者において、比較的安全で有用な検査と思われる。

8. 糖尿病患者における ^{123}I -MIBG 心筋シンチの検討

長町 茂樹 星 博昭 大西 隆
 渡邊 克司 (宮崎医大・放)
 中津留邦展 年森 啓隆 松倉 茂
 (同・三内)

糖尿病(DM)患者の ^{123}I -MIBG (MIBG) 心筋シンチ所見の特徴と臨床所見との関連について検討した。対象はDM 16例(男性10、女性6)、平均年齢57.5歳で罹病期間は1~22年(平均7.4年)で糖尿病性神経障害(CVR-R≤2.0%)の有無により神経障害陽性群、神経障害陰性群に分類した。検査はMIBG 111 MBq 静注20分(early)、4時間後(delayed)に3検出器型ガンマカメラ9300A(東芝)を用いて施行した。神経障害陽性例では高頻度にearly、delayed像いずれもMIBGの前壁、後下壁への集積低下を認めたが、神経障害陰性例においても前、後下壁の集積低下例を認めた。DMでは臨的には軽症な症例でも、心障害を有する可能性が示唆された。

9. $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -MIBI 心筋シンチグラフィの正常像

新里早奈枝 勝山 直文 小川 和彦
 大兼 剛 鶯野谷 利 堀川 歩
 諸見里秀和 山口慶一郎 中野 政雄
 (琉球大・放)

93年10月より運動負荷心筋シンチグラフィの放射性医薬品を ^{201}TI から $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -MIBI に全面的に変更した。従来の ^{201}TI 法に比し胸壁や乳房の影響が少なく、良好な画質が得られた。今回われわれは虚血性心疾患が疑われたが正常心筋イメージを呈した症例を対象に心筋摂取率(心/綻隔)および相対的局所心筋摂取率について検討したので報告した。

10. 肝切除術前後のアシアロ糖蛋白レセプターの検討

大園 洋邦 石橋 正敏 森田誠一郎
 梅崎 典良 早渕 尚文 (久留米大・放)
 平城 守 君付 博 黒肱 敏彦
 山下 裕一 (同・一外)

$^{99\text{m}}\text{Tc}$ -GSA を用いて肝細胞におけるアシアロ糖蛋白レセプターの動態を検討した。対象は、肝癌15例(肝区

域切除 5 例、部分切除 5 例、非切除 5 例)である。使用した放射性医薬品は ^{99m}Tc -GSA 185 MBq である。データ収集は、心臓と肝を含む全面像で 30 分間行った。データ処理は、Dynamic data から肝と心臓に ROI を設定し、Time activity curve を得た。また、 ^{99m}Tc -GSA 投与後、5-6 分の Planar 像を作成し、視覚的に 5 段階に分類し検討した。

非切除例は Grade 3 以上に多かった。切除例では Grade 2 以下が多く、手術前後で著明な差異はなかった。このことは手術適応を決める手段の一つとなりうる可能性が考えられた。

11. 皮下埋め込み式ポートを用いた肝悪性腫瘍動注化学療法における ^{99m}Tc -MAA flow scintigraphy の有用性の検討

松浦 隆志 鶴 博生(国立大分病院・放)
古田斗志也 原口 勝 (同・外)
室 豊吉 原 修身 (同・肝セ)

1990 年 8 月から 1994 年 1 月の 3 年 6 か月の間に国立大分病院にてリザーバーによる動注化学療法を行い、かつ ^{99m}Tc -MAA による肝血流シンチを行った肝悪性腫瘍患者 19 例についてその RI 所見および腫瘍縮小度、予後について検討した。その結果、(1)奏効率は 37% で平均生存日数は 354 日であった。(2) RI の全体的な分布と腫瘍縮小率との相関では、肝門部および肝外集積例は 8 例中 6 例 (75%) が PD で治療効果不良であった。(3) RI の腫瘍集積度と腫瘍縮小率との相関の検討では、腫瘍内の RI 集積が高いほど縮小効果が高い傾向が見られた。(4) RI の集積度と平均生存日数を集積のないものと非癌部と同等あるいは高い集積の群と比較するとそれぞれ 129 日、604 日で明らかに後者の予後が良好であった。

以上、肝転移巣の血流および薬剤分布の把握、またその治療効果予測に対しての ^{99m}Tc -MAA による肝血流シンチの有用性が示唆された。

12. 乳癌の経過観察における骨シンチグラフィの検討

坂田 博道 藤光 律子 岡崎 正敏
(福岡大・放)
浜田 雄藏 (同・一外)

過去 10 年間に骨シンチグラフィを実施した乳癌 431 例中、初回骨シンチ陰性で、経過観察中に骨転移が検出された 34 例について、骨転移の検出時期について検討した。

骨転移時期は術後 1 年以内が 4 例 (12%)、1-2 年 3 例 (9%)、2-5 年 19 例 (56%)、5 年以上 8 例 (23%) で、2 年以降に多くみられた。stage 別では、I 期 1 例 (3%)、II 期 17 例 (50%)、III 期 16 例 (47%) であった。組織型別では、scirrhous type に骨転移が最も多く認められた。骨転移症例では局所再発がみられたのが 17 例 (50%) と多く、他臓器転移では肺 8 例、肝 3 例、皮膚 2 例であった。骨転移は肋骨、腰椎、胸椎、骨盤の順に高かったが、肩甲骨、鎖骨、胸骨にもそれぞれ 11 例 (32%) に認められた。

13. 骨シンチグラフィにて多発性の異常集積像が認められた Cushing 症候群の一例

近間 郁子 星 博昭 長町 茂樹
大西 隆 石川 玲子 渡邊 克司
(宮崎医大・放)
鶴田 敏博 加藤 丈司 (同・一内)

症例は 32 歳女性で、高血圧、無月経を主訴とし来院した。血液、生化学検査にて低カリウム血症、血中コルチゾル高値、血中 ACTH 低値を呈し、Cushing 症候群と診断された。CT、MRI にて左副腎部腫瘍を認め、 ^{131}I アドステロール副腎皮質シンチグラフィにて、左副腎に一致して強集積が認められた。また骨シンチグラフィでは、両側肋骨、骨盤に多発性の異常集積が認められた。術後、腫瘍は病理学的に副腎腺腫と診断され、骨シンチグラフィ上の多発性異常集積は、腫瘍のコルチゾル産生過剰に基づく骨粗鬆症およびこれに伴う病的骨折によるものと考えられ、Cushing 症候群では留意すべき所見と思われた。